

# 長谷川如是閑の中国論（上）

——「国亡びて生活あり」——

田中 浩

一、はじめに

二、辛亥革命から満州事変まで

（a）中国問題にたいする『我等』（初期）の態度

（b）中国旅行記——「国亡びて生活あり」

（c）大正デモクラシー後期から満州事変の勃発まで

（以上本号）

三、満州事変前後

四、日中戦争前後から敗戦まで

五、むすび——戦後の如是閑と中国

一 はじめに

第一次世界大戦直後の一九一九年（大正八）から、満州帝国の成立、ヒトラーのナチ政権の確立にいたる一九三三年

(昭和八)までの約一五年間、雑誌『我等』・『批判』——一九一九年二月創刊、一九三〇年(昭和五)五月『批判』と改題、一九三四年(昭和九)二月廃刊——を媒体に、自由主義者から社会主義者までも含めた広汎な知識人を結集し、「我等グループ」と呼ばれる思想集団を形成しつつ、自由と民主主義の旗を高くかかげて、きわめて精力的にその思想的啓蒙活動を展開し、当時の狂暴にして頑迷なる国家主義(超国家主義)・軍国主義・帝国主義・ファシズムにたいして「ペンの力」のみによって勇猛果敢に闘いをいどんだ後期大正デモクラシー期のオピニオン・リーダー長谷川如是閑にとって、中国問題が、かれの中心テーマであった国家論・社会論・文明論・ファシズム論などと並んで、日本民主化の実現と深くかかわる最重要な関心事であったことはいままでもあるまい。なぜなら、中国問題広くはアジア・大陸(満蒙)問題は、明治維新の成功から敗戦にいたるまでの約八〇年間にわたる近代日本の歴史過程のなかでの日中関係という視点で見れば、日本資本主義や日本における近代国家の形成と切っても切れない関係にあったことはいまさら指摘するまでもないからである。

事実、如是閑は、『我等』・『批判』誌上において辛亥革命(一九一一年一〇月)、中華民国の成立(一九一二年一月)後から満州事変前後にいたるまでのきわめて複雑でわかりにくい中国の国内・国際政治の現状や社会運動の発展、とくに日本の誤った大陸政策などを正しく認識できるような中国及び日中関係にかんする多数の論説やレポートを掲載し、座談会などを企画しているし、また、かれ自身、『我等』創刊以後、約一二〇篇以上におよぶエッセー(中国観)や論説(中国論)を執筆しているのである。にもかかわらず、こんにちまでのところ日本近代政治思想史研究のなかで如是閑の中国観や中国論にかんする本格的な研究がほとんど皆無に近いのはまことに奇妙なことといわざるをえない。<sup>1)</sup>ところで、如是閑が、幼年時代から中国の思想とくに老子の思想に興味を抱いていたことは、かれの自伝『ある心の

自叙伝』のなかにもしるされているが、かれが、中国の近代国家形成をめぐる問題点、日本の中国政策の基本的態度やそれをめぐる批判などについて理論的な鋭い分析のメスを入れ、中国問題を本格的に論じはじめるのは、当然のことながら、『我等』創刊後、四・五年ほど経った一九三三年（大正二二）、二四年（大正二三）の時点からである。おそらくこの頃までに、日本のアンシクロペディスト（百科全書学者）如是閑は、中国近・現史にかんする研究を着実に進めてきていたものと思われる。したがって、如是閑の中国論の主要なものは、ほぼこの時期から満州事変前後にかけて書かれており、またこの時期は、日本の側からいえば、ちょうど大正デモクラシー後期から昭和ファシズム開始期にあたり、日本民主主義の確立をめぐる戦前最後の熾烈な攻防戦が展開されていたもつとも重要な時期であり、そのさいには、とくに、大陸（満蒙）問題が軍部ファシズムの擡頭と密接にかかわっていたのであって、その意味でも、われわれは、如是閑の中国論を無視して通り過ぎるわけにはいかないのである。

以下、本稿では、「辛亥革命から満州事変まで」、「満州事変前後」、「日中戦争前後から敗戦まで」、「戦後」と、大きく四つの時期区分によって、如是閑の中国論について略述する。

- (1) この点については、野村浩一「Ⅲ、大陸問題のイメージと実態」、『近代日本政治思想史Ⅱ』（近代日本思想大系第四巻）所収、有斐閣、昭和四五年三月、野沢豊「Ⅱ、中国革命・ロシア革命への思想的対応」『近代日本社会思想史Ⅱ』所収、有斐閣、昭和四八年七月が参考になった。
- (2) 長谷川如是閑『ある心の自叙伝』（一九五〇年六月、朝日新聞社）。本稿では「講談社学術文庫」におさめられた『ある心の自叙伝』を用いた。（昭和五九年五月）一三八―一三九、二五一、三一五―三一六ページ。

## 二 辛亥革命から満州事変まで

中国四〇〇〇年の長大な歴史のなかで、はじめて市民的統一国家への道を切り開く展望をみせたかに思われた辛亥革命（一九一一年）が起こった年の三年まえ（一九〇八年（明治四一））、如是閑は、「大阪朝日新聞社」の編集長鳥居素川のすすめで、政論新聞『日本』の後身たる「日本及び日本人」社から「大朝」へ移る。かれ三三才のときであった。

ネーション・ワイドな日本の代表的新聞社「大朝」を格好の活動舞台とすることによって、如是閑は、いよいよ、この大正デモクラシー後期におけるオピニオン・リーダーとして大きく飛躍するチャンスと基盤をえたものといえる。それから約十年間、如是閑は、大正デモクラシー運動において指導的役割を果さんとする「大朝」の社是を實踐するたために、日本の自由化・民主化のために縦横無尽の活動を開始する。しかし、ロシア革命の翌年の一九一八年（大正七）、「大朝」が筆禍事件（白虹事件）を理由に、ときの軍閥の首魁寺内正毅率いる「ビリケン」（非立憲）内閣の弾圧を受け、事態は、経営体としての「大朝」の存立にかかわるほどの危機的状況を惹き起こしたため、社会部長の職にあった如是閑は、その責任をとって、鳥居素川とともに退社する。このとき、大山郁夫、丸山幹治、花田大五郎なども連袂退社しているが、この事件は、その後ますます激しさを加えるジャーナリズムにたいする検閲制度の強化、広くは言論・思想の自由への狂暴な抑圧を予示する不吉なできごとのまえぶれであった、といつてよい。そして、退社後の翌年二月、如是閑は、国家権力からの制約を受けないような言論活動の場を確保するために、大山郁夫、丸山幹治、井口孝親らとともに、雑誌『我等』を創刊し、以後、一九三四年（昭和九）二月に『批判』を廃刊するまで、日本民主化のための啓蒙活動を展開することになる。ではその啓蒙活動の一環としてきわめて重要な地位を占める中国問題について、如是閑はどのような基本的態度をとりまたどのような主張をおこなっていたか。

(a) 中国問題にたいする『我等』(初期)の態度

『我等』が中国問題を、いかに重視し、またそれをどのように正しく認識し、さらには今後の日中間の友好関係樹立にいかにより最善の努力を傾けていたかについては、初期『我等』に掲載された二、三の論説をみればわかる。

i 「対支政策の根本主張」(『我等』第一巻第一号 一九一九年二月)。この主張は、『我等』創刊号の冒頭部分に掲載されており、これによって如是閑がその啓蒙活動を開始するにさいして、中国問題つまり日中関係の友好・改善の問題をいかに重視していたかがわかる。もっとも、この論文は無署名であるので、如是閑が直接書いたものかどうか、あるいは「我等グループ」の同人の誰かが書いたものかは判然としないが、文体・論旨からみておそらく如是閑の手に成るものではないか、と推測されるが、たとえ、そうでなくとも、如是閑のその後の論説の基調からみて、この「根本主張」は、如是閑の思想そのものと考えてよいだろう。

論文の主旨は、日本の軍閥は、不当な対支干渉や武力的侵略主義をやめよ、というものである。以下、本論文のいくつかの箇所を引用しておく。(漢字の旧字形は、新字形になおしてある)。

「我等の対支政策は、根本的に私心を捨てることである。……私心をもって、对人的関係、若くは国際的關係に臨むことは、甚だ不公明なことである。又对人的、若くは国際的關係を処するに当たり、威圧とか、征服とか言う方法を取ることは、既に過ぎ去って仕舞つた。」(一〇ページ)。

「我国と支那とは、各種の点に於て、一致せねばならぬ。にも拘らず、事實は、理想通り、総ての点に於て、悉く一致すると言う、状態になつて居らぬ。……私心を応用すると言うことは、……権謀術数とか、威圧征服とか、利己

的政策とか言うことであつて、今日大きな眼をもつて、人類の幸福を図る場合には、最も禁物である。」(一〇ページ)。  
「然るに、或る一部の職業的人物は、此私心を唯一の手段として、国際間に臨んでいる。それは軍閥である。……  
我國民は、支那に対して、好意を有するにも拘らず常に支那人に疑はれて、排日思想を養成するのは、畢竟此軍閥が、  
政策を誤るからである。」(一〇ページ)。

「寺内々閣の対支政策は、全く軍閥の手先に過ぎなかつた。原内閣に至つて、此政策を覆したにも拘らず、今もつて  
支那人の悪感を除き得ないのは、矢張り軍閥が、我國の一要素であると言ふことを信ずるからである。」(一〇ページ)。  
「……金を貸すことも、私心を捨てて、善意的に出ずるならば、支那も衷心から感謝するであらうけれども、総て  
が攻略的に出ずるから、折角貸した寺内々閣の一億有餘円も、有効でないのみか、却つて有害となつて仕舞つた。」(一  
一ページ)。

「……侵略とか、野心とか、若くば武力を以て支那を統一するとか言ふやうなことは、過去の夢であつて、今日は  
時代遅れに過ぎぬ。……故に、対支政策の根本要義は、私心を捨てることにあると思う。私心を捨ててかかれれば、南  
方も北方もない。ただ公正なものを助くるにあるのみだ。我等同人の主張が、往々南方派に味方するやうに見えるのは、  
此公正の理が多く南方派にあるからである。北方派と言っても色々あるけれども、有力者は、我國の軍閥と相提携し、  
私心と私心とをもつて、対内的にも、対外的にも処分するから、我等は国内の軍閥を攻撃するやうに、又北方派の或軍  
閥にも反対するのである。」(一一―一二ページ)。

「我等には、何等の私心はない。北方派でも、覚醒するところあつて、此公正の理に適合するならば、皆我等の味方  
である。我等の標準は、一に公正にある。公正を期するには、私心を捨てるにあると思ふ。これ我等の対支政策の根本  
的主張である。」(一二ページ)。

以上、「我等グループ」および如是閑の対支政策の基本的態度の概要を紹介したが、その内容を理解するうえで必要なコメントを若干付け加えておきたい。

辛亥革命（一九一一年一〇月一〇日）の翌年の一月一日に、民主共和を標榜する中華民国（首都、南京）が誕生し、孫文が臨時大總統に就任（のち一九一三年一〇月一日、袁世凱が正式に大總統となる）、ここに、太祖ヌルハチの即位から二九七年続いた清朝政府が崩壊した（一九一二年二月一二日）。

しかし、中国における近代国家形成への道は、中華民国の誕生によっても容易には達成されなかった。なぜなら、袁世凱が民主共和国の確立を目ざす孫文との約束を破り、皇帝の地位を狙う野望を抱いて（一九一六年一月一日、即位）、専制政治を布き、そうした動きに、袁世凱子飼いの段祺端・馮国璋らの將軍や副總統黎元洪、さらには雲南將軍の唐繼堯、広西將軍陸榮廷らが反旗をひるがえしたため、以後、中国の政治はしばらくの間、軍閥間の混戦時代に入ったためである。こうした中国の混乱に乗じて、日本は、日清・日露戦争の勝利以来、獲得してきた満蒙における特殊権益を守り、そればかりか、第一次世界大戦中の山東出兵を口実に中国大陸内部にもその足場をえようとして強圧的で不当な一連の対支政策を強行してきた。第二次大隈内閣が袁世凱に突きつけた「二二カ条要求」（一九一五年（大正四）一月一八日）、袁世凱の死後（一九一六年六月六日）、力をつけてきた北洋軍閥安徽派の軍閥段祺端にたいする寺内内閣の資金援助（西原（亀三）借款（一九一七年七月二〇日、段祺端内閣を援助、南方派には援助せずとの閣議決定））決定などがそれである。かかる日本政府および軍閥らの侵略主義的行動は、ロシア革命のインパクトにも影響されて、中国の大学生や知識人らによる抗日運動の広がりとなって現れた。

したがって、如是閑たちが、ここで提言していたことは、これまでの日本の対支政策は、真に中国の民主化や中国民衆の利益となるものではないことを日本国民にアピール・啓蒙し、同時に侵略とか、武力を以て中国を統一するとかい

うようなことは、もはや時代遅れのものであることを指摘し、日本政府や軍閥にたいして猛省をうながしたものと見えよう。

事実、この提言のわずか三か月後に、北京大学の学生を中心に「二一カ条の廃棄」、「山東の権利を回収し、青島を返せ」という要求をかかげた大規模な反日運動「五四運動」が勃発している。このとき、北京大学総長蔡元培や孫文・康有為らが「五四運動」を支持しているが、如是閑たちが北方派と呼んでいたのは、おそらく段祺瑞およびそれと結んでいた奉天軍閥張作霖を、また南方派とは反袁派の陸榮廷、唐繼堯らの南方軍閥ではなく、一九一七年九月以降、広東に基盤をおき、三民主義の実現を目ざしていた孫文らの国民党派を指していたものと思われる。いずれにせよ、当時の中国状況はきわめて混沌としており、政権の帰趨の先き行きを見定めることは困難であったにちがいない。したがって、如是閑たちは、この時点では、北方派であれ、南方派であれ、公正な立場をとるものならばこれを助ける、と宣言せざるをえなかったであろう。

ii 「支那の共産主義宣伝」(『我等』第一卷第九号、一九一九年七月)

本論文も、iの「対支政策の根本主張」同様に、いわば『我等』の主張ともいうべき冒頭部分に配置された、その意味で重要な無署名論文である。したがって、如是閑が本論文を直接に執筆したのかどうかはこれまた確定できないが、ここに書かれていることは「我等同人」の共通見解であった、とみてよいだろう。

さてこの論文は、青島(山東)問題をめぐる五四運動の勃発、排日運動を続ける中国学生の中に、ロシアのボルシェビズムが急速に浸透し大きな影響を与えつつあること、また孫文らの国民党系の人びとの国民運動のほかに、中国民主化闘争の新しい勢力として共産主義運動が加わってきていることを鋭く指摘している点で、きわめて注目すべき論文と



いえよう。そして、本論文では、その結論部分において、こうした中国における新しい状況の出現について次のようにコメントしている。

「一切の成行きは、之を今後の事実に徴するの外はないが、しかし若しこの露国過激派伝来の共産主義運動が、中華民国の民衆の間に、一般的に宣伝されて行く様な事があつたならば、本来立国的にも、又国民性的にも共和的であり、且つ旧くから共産主義の教訓の行はれていた支那としては、おそらく相応な速力の感染性を以て、四億民衆の間に拡まり行かぬことを、誰れが保障し得るであらうか。が我等は孫〔文〕、張〔繼〕、孫〔洪伊〕、載〔天仇〕諸君が、支那のレーニン・トロツキー其他たるに至ることが、支那及び東洋の将来の為に妥当の行路であるや否やについて、尚深く考慮を要するものがあると思ふ（「」は筆者がつけたもの）。（五、六ページ）。

如是閑たちには、当然のことながらまだ、その後の中国の国民革命の将来における、国民党と中国共産党との間の、協同・対立・敵対関係についての見透しについての把握が十分にできていない。しかし、中国において共産主義運動が大きな影響力を与えつつあることだけは、認識している。

では、五四運動後、中国の革命運動はどのように進展したのか。すでに一九一七年一月に起つたロシア革命は、中国の知識人や学生たちに大きな関心をよび起させた。革命は、民衆つまり労農階級を基盤にしなければ成功しないことを五四運動に参加した中国の学生・青年たちは身をもって感じつつあった。

一方、一九一九年三月二日（六日）に、ソ連は世界の革命運動の指導組織であるコミンテルンを結成し、極東部長ボイチンスキーが中国の革命家たちに共産党を組織させるために一九二〇年三月に中国を訪れ、北京で李大釗に、上海で陳独秀に会っている。そして五月には、上海に陳独秀を中心とする共産主義者のグループが、次いで同種のグループが、北京、漢口、天津、広東、濟南などにつくられた。翌一九二一年七月には、これらのグループが上海に集まって中

国共産党の創立大会（第一次全国代表大会（一全大会））を開いている。黨員総数五七名で、のちの中国共産党の指導者毛沢東も参加していたことはいうまでもない。

しかし、当時の共産党の力はきわめて弱かったので、レーニンの「民族および植民地問題に関するテーゼ」（コミンテルン第二回大会、一九二〇年七月）に従って、ソ連は孫文および中国国民党との提携を図るために一九二一年一月、当時、桂林にいた孫文と会い国共合作を提案する。その後、一九二三年一月の「孫文・ヨッフエ共同宣言」、一九二四年一月の中国国民党第一次全国代表大会の決議（「連俄」（ソ連との提携）、「容共」（共産黨員の国民党加入）、「扶助農工」（労働者・農民を助けて、反封建軍閥、反帝国主義の革命の遂行））を経て、ここによりやく国共合作が正式のものとなった。

もちろん、『我等』誌上において、「支那の共産主義宣伝」が書かれたときは、中国共産党創立の二年前、国共合作決定の四年半ほどまえのことであるから、この論文においてその後の事態がどのように進むことになるのかは当然に予測していない。しかし、この時点において、いまや、中国において共産主義運動が無視できないものとなりつつあることを認識していたことは注目すべきことといえよう。

iii 「支那統一の疑問」（『我等』第三卷第六号 一九二二年六月）

本論文もまた i ii の論文と同じく、『我等』冒頭部分に掲載された無署名論文である。如是閑をはじめとする「我等グループ」の中国認識のいっそうの深化を知る好材料である。一九一九年の五四運動後、革命運動は反帝国主義的ナショナリズムの性格をますます強め、そのため学生・知識人の戦列に、新たに労働者階級や農民階級の勢力が参加する形勢をみせていた。他方、中国統一をめぐっては、相いも変わらず南北の軍閥がその指導権争いをくり返していた。そ

してこの論文が発表された一カ月まえの五月、広東の軍閥陳炯明にかつがれて孫文が広東新政府の大總統に就任している。したがって、この論文は、孫文が大總統に就任したことをふまえて、中国統一運動の方法についての問題点を論じたものといえる。素早い反応というべきであろう。

ここでの論点は、次の二点に要約できる。

第一点は、中国統一をめぐって、北方軍閥の目ざす中央集権国家構想と孫文らの目ざすアメリカ型の聯邦式分権国家構想についての問題点が述べられ、日本やイギリスなどの列強は各自の利害という立場から北京政府の確立を希望し、それを後押ししていることが指摘されている。

第二点は、如是閑たちは、孫文らの聯邦方式による国家構想を無条件に押ししていたかどうか、という点である。これについては、如是閑たちは、孫文らの「各省の自治」を重視する国家構想には賛意を表しつつも、その実現方法について苦言を呈している。なぜなら、中国の革命運動は、いまや民衆を基盤に進められなければならない社会的性格を含んだ段階「社会変革」にきているにもかかわらず、孫文らがいぜんとして政治的分野「政治革命」に重点をおいて問題の解決をはかろうとしているのは、従来の軍閥の力を背景に中国統一をはかるやり方と変わらない、との危惧の念を如是閑たちが抱いていたからである。

いずれにせよ、当時の混沌たる中国情勢のなかで、中国統一がどのような形で達成されるのかは、誰しもよく知りえなかったと思われるが、本論文においていまだに軍閥との関係の切れていない孫文らの国民運動の方向について、その矛盾の本質を鋭く捉え批判しているのは興味深い、だから、この論文は、「将来の支那国家が産業的・地方的基礎の上に築かるべきものであるとすれば、列国の強制や、支那自身の浪漫的革命は到底決定的条件をなすものとは思われない。我等は、支那の統一については、全くの疑問としてそれを提示するに止め、一般の考案を求めたいのである」(四ペー

ジ)と結んでいる。

この論文が発表されたちようど二年後の一九二三年六月に、いまや勞農民衆と手を結ばなければ革命は成就しないという認識に達した孫文が国共合作に踏み切ることになる。これによつても、如是閑らの先見性が注目されよう。

(b) 中国旅行記―「国亡びて生活あり」

如是閑が『我等』創刊当初から中国問題に並々ならぬ注意と関心を向けていたことは、たとえば、一九一九年から二三年頃まで、つまり如是閑自身が本格的にかれ自身の中国論を展開しはじめる頃まで、『我等』誌上において、北京在住の清水安三(一九一六年、中国人にたいしてキリスト教を伝道する唯一の日本人として中国に渡り、以来各地を伝道して回り、そのかたわら中国事情の研究もおこなっていた篤志家)に、さまざまなレポートを書かせていることからわかる。いま例示すれば、「支那生活の批判」(第一卷第六号、一九一九年五月)、支那人の新旧思想―国学から過激思想まで―(第一卷第二号、一九一九年九月)、「在支外人生活の批判」(第一卷第一四号、一九一九年二月)、「支那の戦争を目撃して」(第二卷第一〇号、一九二〇年一〇月)、「支那最近の思想界―民衆運動の傾向―」(第二卷第八号、一九二〇年八月)、「支那に亡国の兆ありや―支那の将来と対策如何―」(第二卷第一号、一九二〇年一月)、「支那改造の原理―改造論の種々―」(第三卷第三号、一九二二年三月)などである。これらのレポートの内容は、いずれも質が高くかつその分析的確で、(a)で紹介した初期『我等』の一連の対支政策の主張を構成するうえで、それらに大きな影響を与えたものであることはまちがいない。

こうした知的準備作業をかさねている間に、いよいよ如是閑は、一九二一年八月下旬から一〇月初旬にかけて第一回の中国旅行に出掛け、直接、かれ自身の目で中国を観察する機会をえる。その後、如是閑は、一九二六年(第二回)、

一九二八年（第三回）にも中国に旅行しているが、あとの二回については、如是閑が本格的に中国論を展開する一九二三年以降の日中関係の進展・変化に合わせてそのつど言及することにして、ここでは、第一回目の中国旅行記について、言及しておく。

如是閑は、一九二一年八月一七日に神戸を発ち、一九九日に長崎港から上海に向けて出航し、二一日に上海着。その後、漢口、北京、天津、奉天、哈爾賽、大連、さらに九月半ばに朝鮮に入り、平壤、京城、仁川の各地で講演し、一〇月初旬に帰国している。

そして、この最初の中国大陸訪問の印象を、一九二一年十一月の『我等』第三卷第一号から一九二三年三月の『我等』第五卷第三号まで、約一年半近くにわたり、「支那を見て来た男の言葉」というタイトルで一二回連載している。紀行文の体裁をとってはいるが、内容自体は立派な中国論であり、この中国旅行によって如是閑が獲得した中国認識が、その後のかれの中国や中国人を見る眼、中国の政治・経済分析の方法論的基礎になったことはたしかである。

この紀行文は、A「支那へ行ったことのある男」、B「此頃支那へ行って帰ってきた男」という二人の男の会話形式によって話が進められているが、AもBも如是閑その人であることはいうまでもない。また、それぞれの紀行文についてあるいはこの長大な紀行文の全体について論旨を要約できないことはないが、中国大陸にはじめて足を踏み入れた如是閑の率直な驚きや感想をそのまま提示したほうが、如是閑の中国認識をより生き生きと伝えられる―如是閑自身に語らしめよ―と思うので、やや長くなることを覚悟のうえで、本文からの引用を試みる。

i 「支那を見て来た男の言葉」（第三卷第一号、一九二一年十一月）

「B、・・・日本見たいな国は、十や二十投げ込んで、ケロリとして舌舐ずりもしない大洋（黄海・東シナ海）を

閉口させるのだから、支那といふ国は恐ろしい国だね。〔傍点筆者、以下同じ〕(三三二ページ)。

「B、格別支那を大きいと思つたのぢやない。．．．それにしても日本が格外に小さいのに驚いたのだ。が少し考えているうちに、自分はさういう風に日本の小さいことに驚いたのだと思つたのは間違ひで、実は、小さい日本を日本人だけが馬鹿に大きいやうに思つているその錯覚に驚いたといふ方が当たつてゐることを発見したのだ。」(三九ページ)。

「B、その錯覚に驚いたといふよりも、その錯覚に元づいて、自分や自分の国だけでなく、他人や他国のことを考へている無鉄砲に驚いたのだ。お互人間同士の間には感覚の問題が一番大切で、こいつが懸け離れていては話にならないのだが．．．そんなことでは、到底日支親善はおかしいよ。」(三九ページ)。

ii 「支那を見て来た男の言葉(つゞき)」(第三卷第二二号、一九二二年二月)

「B、．．．大勢いる支那人が皆私には、西洋人よりも日本人よりも善い人種としか見えなかつたよ。少なくとも、先刻日本の宿屋〔上海〕で出喰はした日本人達よりも、ずっと昔の人間で、さうしてその後の歴史が教えている悪い事をまだちつとも覚え込んでいない人間のやうだつたよ。．．．私は、何といふ理由なしに、大辺好い国に來たやうな氣になつてしまつたよ。．．．人間が皆豚のやうで平和で、無邪氣で、榮養が足りてゐるように見えたよ。こんな人達を見てゐると日本人が狼のやうに見えて來たよ。西洋人は獅子のやうに思はれてならなかつたよ。」(三二―三三ページ)。

iii 「支那を見て來た男の言葉(對話)(つゞき)」(第四卷第一号、一九二二年一月)

「A、．．．あの支那街の狭い横町の汚ない植物屋が列んで油臭い煙が朦々と立ちこめてゐるところを通つても汚ないと思はなかつたかい。」(四五ページ)。

「B、別に綺麗だとも思はなかったが、格別汚たないとも感じなかったね。・・・如何に汚たないものでも、それが何かしら此方の生活の感じに触れていると、此方では、その感じだけを捉えて汚た〔な〕いことを忘れてしまうものだからね。」(四五ページ)。

「B、私は一種の生活の興味をそこに認めたので、外のことを忘れたのかも知れない。第一に、如何にも食料の豊富な国だといふことを感じたね。」(四五ページ)。

「B、・・・支那国民見たいに、遊食階級を十分に喰はしていながら、自分達も相応に喰っているという国民は、今の世界では一寸珍しいね。横町に入つて、私はそれが羨ましかった。」(四六ページ)。

「B、・・・日本人は、支那の至る所に神社を建てているが、一体神社というものは、神聖な地域に神々しい森であつてそこに鎮座ましましてこそ大に敬虔の念も起るのだが、〔日本〕料理屋の片隅や、ガランとした野原・・・に建ててそれが日本の神様のお住居だなどといつては、埃及やアラビヤや支那の神様に比べて、神様の幸不幸が余りにひど過ぎる。」(五一ページ)。

「A、そこだよ、満洲へ行つて見たまへ、矢張り至る所に神社があるよ。・・・上海のは日本人の遊興を神も照覽あれといふのだが、満州のは、日本人の大陸経営を神も照覽あれなのだ。」(五二ページ)。

「B、・・・日本人は、まだまだ民族的感情が強い上に、それが全く神話の域を脱していないのだから、民族的発展には、先づ神様が先導されるのだよ。基督教国でも東洋やアフリカに向かつて侵略しやうとすると、先づ宣教師を差し向けるぢやないか。あれはキリストが先導するのだろうよ。」(五二―五三ページ)。

iv 「支那を見て来た男の言葉 (対話) (つゞき)」(第四卷第二号、一九三二年二月)

「A、……一体日本のこれまでの教育は、外国人のものなら何でも奪り上げてしまふのが日本の国益だと教えていたのだからね。……『バイカルから此方は日本のものにする』と力んだ学者をバイカル博士なんて冷やかしたけれども、つい此頃、その手前まで出掛けやうとして失敗したりしているのは〔シベリア出兵〕一体何処の人だい。」（四七ページ）。

「A、支那人はもう、日本人は、口ではいろいろなことをいふが、結局支那の土地か金を取りに来る奴ばかりだと定めてしまったのだよ。」（四八ページ）。

「A、……日本人は、外国へ行くと、まるで隣の人の懐に覬ひをつけたスリのやうな氣組みになってしまふから、その居る土地にも、土地の人にも親しみが持てやしない。さうして結局その隣の人の懐に手を突込まなければ承知しないのだからね。それを称して国益といふのだからたまらない。」（五〇ページ）

「B、それは西洋人だって同じだよ。皆国益がアテなのだよ。」

「A、それはさうさ。今の処、白人の侵略の外に、世界に立派な侵略が成り立ってはいないのだからね。然し同じ侵略でも白人のと日本人のとは流儀が違うのだよ。白人は、自分の生活を、その侵略地で安定せしめる氣組みでかかる、それが白人の世界中にその根を据えている所以なんだよ。これに反して日本人は、侵略地から何かしらカッ攫って、それを抱へて本国へ帰って行かなければ承知しないのだからね。……もう満州を經營してから二十年近くなるが、まだあそこに骨を埋めた日本人は殆んど一人もないと言つていい位だというのだから呆れるぢやないか。」（五〇ページ）。

v 「支那を見て来た男の言葉Ⅱ楊子江Ⅱ」（第四卷第七号、一九二二年七月）

「A、然し『帰らなんいざ、田園將に蕪せんとす』〔陶淵明〕という書き出しは何となく好いね。」（二五ページ）。



「B、それが支那人の生活本能の現はれだろうよ。退隱といふことが、政治界生活を見捨てることを意味して、生活を見捨てることを意味していないのが面白いのだよ。・・・『生活でない生活〔政治界生活〕を捨て、生活である生活に入る』といふので、支那人が退隱を生活の上で確かに誇るべき一種の行動と認めたところに、支那人の生活本能を現はしているのが面白いのだよ。」(二五ページ)。

「B、・・・生活を尊重するところから、支那人の楽天的態度が出て来るのだよ。」(二五ページ)。

「B、支那を数千年間持ち堪へたのは、有名にならない百姓達なんだよ。もし皆有名になっていたら、支那はとうに亡びているんだよ。陶淵明が『帰らなんいざ・・・』といったのがそこで面白いのだよ。帰らない奴ばかりだったら支那は亡びるんだからね。」(二六ページ)。

vi 「支那を見て来た男の言葉(承前)」(第四卷第四号、一九二二年四月)

「A、南京は見物したかね？」(二ページ)。

「A、何うだい、あすこは如何にも国亡びて山河ありの感があったらう。」(二ページ)。

「B、『国亡びて山河あり』という言葉は、生活即ち国家という考方しか教えられて来なかつた連中の言ひ艸だよ。さういふ人達は、国が亡びると山河しか残っていないと思ふのだよ。」(二ページ)。

「A、山河しか残っていないぢやないか。」(二ページ)。

「B、国が亡びたつて山河ばかり残っているのぢやないのだよ。人間も残っているのだよ。」(二ページ)。

「A、では何といへば好いのだい？」(二ページ)。

「B、『国亡びて生活あり』といふのが正しいのだよ。」(二ページ)。

「A、・・・南京は何うしたんだよ。」(二ページ)。

「B、だから、『国亡びて生活あり』だよ。支那は真実に僕は気に入ったよ。国が亡びやうが興らうが、生活がそんなものと没交渉に繁昌して行くといふのは心強いよ。今日の北京政府なんか影も形もなく亡びてしまっても、支那の至る所『国亡びて生活あり』で繁昌しているだろうよ。」(二ページ)。

vii 「支那を見て来た男の言葉 II 南京 (つゞき) II」(第四卷第五号、一九二二年五月)

「B、・・・だから夫子廟〔孔子廟〕なんかは、一般支那人の本心とは没交渉な国家的裝飾に過ぎないのだよ。見給へ、政治的権力の所在地には、屹度孔子の廟があるから。」(二二ページ)。

「A、・・・その癡軍国的の関羽廟が夫子廟よりも一般人民の信仰を集めているのは何ういふ訳だらう。」(二二ページ)。

「B、あれかい・・・関羽というおヂサンは岩見重太郎見たいに義の為に強を挫き弱を助けた豪傑なんだね。支那の人民の最も恐れる所は国家的掠奪と土匪的掠奪と疫病とだろう。関羽は、国家と土匪とを、人民の為に防いでくれる神様として信仰されている訳さ。」(二二ページ)。

viii 「支那を見て来た男の言葉 (つゞき) II 漢口 II」(第四卷第一〇号、一九二二年一〇月)

「B、日本人は外へ出ると『餘所行き』で往生していなければならぬから、皆金を溜めて本国に帰る外に望みはない事になるのだよ。」(二三ページ)。

「B、・・・日本人にとっては、海外の生活といふものは、自分達の具体的『生活』ではなくて、『日本の発展』

といふ抽象的の理想なんだからその理想を何かの形で現はすものさえあれば、自分達の『生活』なんどはどんなでも構はないといふんだよ。日の丸の旗でも、無線電信の柱でも、兵営でも、条約でも、何んでもいいから、それが『日本』の国威を示して居てくれ、ば満足している、といふ顔をするのを日本臣民の義務と心得ているのだよ。」(一六ページ)。

ix 「支那を見て来た男の言葉Ⅱ漢口(つゞき)Ⅱ」(第四卷第二号、一九二三年一月)

「B、・・・日本人が、支那人を掠奪する鉄砲玉製造の手伝ひなんかしなくてもいいんだからね。」(四ページ)。

「A、ところが世界的に有名になっている二十一ヶ条といふ奴は、それを日本の一手に引受けさせるなんていふんだからね。」(四ページ)。

x 「支那を見て来た男の言葉Ⅱ北京Ⅱ」(第五卷第一号、一九二三年一月)

「A、・・・あの袁世凱が皇帝の時(一九一五年二月帝制宣言、一九一六年三月帝政を取り消す)に建てた白い石造りの素敵に大きい城門を見たらう。」(七二ページ)。

「B、・・・何處の国でも城門なんてものは過去の遺物なんだが、北京ではそれが現代的に役立っているから面白いといふものだよ。」(七二ページ)。

「A、何がそんなに面白いんだよ。」(七二ページ)。

「B、だからさ、それが、支那といふ国は、何うしても、統一国家になり切れないといふ証拠なんだから面白いのだよ。支那といふ国を一つの帝国で纏めようとするれば、何時になっても、中世式軍国組織を採るより外途はないといふことを示しているのだよ。」(七二ページ)。

「A、ぢや袁世凱だつて出来ないことをやらうとした馬鹿で、豪くも何ともないぢやないか。」(七三ページ)。

「B、参謀本部なんてところでも、もとは支那の馬鹿〔軍閥〕と協同して支那大陸に日本の国威を張らうとしたものだよ。」(七三ページ)。

xi 「支那を見て来た男の言葉 北京(つゞき) Ⅱ」(第五卷第二号、一九三三年二月)

「A、・・・一体軍国文化位金を喰ふものはないんだよ。金匱の浪費そのものなんだよ。丁度、徳川氏が日光廟を作つたやうなもので、大名の金を浪費するといふ外に、何の意味も目的もないんだからね。金の有る所へは屹度勢力がつくので、ひどく他人や民間に金の出来ることを慮れたものなんだね。北京の軍国文化も、矢張り金を費ふ方法だったのだから、貧乏人がそのアトを引受けたら災難だよ。」(一―二ページ)。

「B、それは軍国文化ばかりぢやないよ。すべて文化といふものは、巻き上げた金の使ひ途に困つて出来たものなのだよ。資本主義文化だつてさうだよ。何う金を使つたら好いかといふところから、発生した文化なんだよ。現代の神経衰弱は、その心配が原なのだよ。」(二ページ)。

「B、・・・金ばかりぢやないんだよ。人間の労力を浪費するのが軍国文化の特徴なんだよ。軍国々家は、征服から成り立っているのだらう。その場合征服する民族は必らず腕力は強いが生産能力に乏しい奴なんだよ。(日清戦争もさうだらう。)これに反して、征服される民族は腕力は弱い、生産力が強いのだよ。そこで征服者は、被征服者がその生産力を發揮するのを黙って見ると、必らずその被征服者の生産能力の為にヤツつけられてしまうのだよ。」(二ページ)。

「A、天壇なんかは、天地風雷雲雨の神々を祭るところだからあれで好いが、日本の神様なんかは、あれから見ると確かに趣味が精練されているね。・・・日本の神様ほど質素好きの神はこれも世界無類だらう。」(四ページ)。

「B、だから日本人は元来軍国的民族ぢやないんだよ。神代の伝説を見ても、い、神様は大抵弱かったよ。そうして荒っぽい軍国的神様は排斥されていたんぢあないか。素盞尊なんかは・・・。」(四ページ)。

「A、然しそれは何といつても、日本民族は比較的幸福的な民族だといふことだね。軍国々家のために労力浪費の厄を脱れて来たんだからね。」(五―六ページ)。

「B、その代り、目下その厄に罹っているんだよ。文明国中で、軍費のパーセンテージでは、日本が世界一だからね。祖先が難儀していた方が、我々が難儀しているよりはよかつたらうよ。」(六ページ)。

xii 「支那を見て来た男の言葉Ⅱ北京(つゞき)Ⅱ」(第五卷第三号、一九二三年三月)

「A、萬壽山は、それでもまだ別荘だけに、人間の棲家らしいところもないでもないが、紫禁城と称する元の宮城に至つては、まるで人間の生息に適する構造ぢあないね。・・・あんなところに押込められていなきゃならないんでは支那の天子たるも亦辛いかなと同情せざるを得ないね。」(一ページ)。

「B、・・・元来、支那の王様は、太古から平の人民から出たり地方の豪族から出たり、隣国の野蛮部落から出たりしたのだから、一向に神様らしくはしなかつたのだよ。模範的王様の堯舜だつて、素性の知れない百姓出ぢやないか。さうして、人民と一緒に働いたり、隠退すれば只の人民になつたりして、まるで今のアメリカの大統領見たいなものだつたのだよ。天が後世に至つて段々墮落して、神様になつてしまつたのだよ。」(三ページ)。

「A、墮落して神様になつたのかい？」(三ページ)。

「B、・・・前にもいったかも知れないが、一体支那に来て見ると、日本にあるものは皆支那にあることが知れるのだよ。然かも支那の方が、日本より先きに産まれているんだから、日本の方が支那の真似をしたといふより仕方がないだろう。」(六ページ)。

「B、・・・異民族が接触する時に、互にその文化的外観を真似するのは、先づ大道の物売りから始まるのだよ。日本が西洋文明に接触した時に、先づ西洋文化の模様が矢張り物売に現はれたんだよ。古い〔山〕高帽子に変なフロックを着て、西洋太鼓を今の楽隊のする通りに胸に抱へて、『パン、コリヤパン、メリケンのパン』って怒鳴って歩いたパンや僕少年時代まで、まだ盛んに残っていたんだよ。滅多に洋服の人が、往来を歩るいていない時分から、物売だけが先づ外来思想を摂取したんだよ。日本が支那と交通を始めた当時も、先づ物売が一番始めに支那思想になって、その次ぎに悪化したのは『物識り』だったらうよ。今日でも、その順序だからね。」(七ページ)。

「B、・・・凡そ文化の交通は矢張り、道路を通って来るのだよ。・・・支那の文化も、長崎あたりまでは船で来てあすこから内地は、まだ鉄道がない時代だからノコノコと道路を練って来ただらう。所で、物売りも物識りも共に街頭に叫んで飯を喰ふあきんどだから、道路を練って来る文化に、先づ第一にぶつかる筈ぢゃないか。でいの一に、物売りや物識りが怪しげなれども洋服を着て、『パン、コリヤ〔ア〕、パン』だの『カント、コリア、カント』だの、しまひには『クロポトキン、コリア、クロポトキン』だ、いんや『マルクス、コリア、マルクス』だって、大道のマン中で喧嘩までオッ始めるのんだよ。」(七ページ)。

「A、・・・あの宮殿の中に『浴徳殿』といふ土耳其風俗があつたが見たかい？」(七ページ)。

「A、あれは、乾隆帝がその寵妃の為に作ったのだといふことだよ。その妃は帝が回教徒の捕虜の中から選びだしたのだが、何うしても意に従はないので、とうとう回教徒の好きな風呂場を作って、そこで征服したといふ話なんだよ。」

そんな風呂場を『浴徳殿』とは、亦とんでもない名をつけたもんだね。」（七〇八ページ）。

「B、『欲得殿』の間違ひだらうよ。然し、さういう風呂場に、そんな名をつける所に征服者の観念生活の特徴があるのだよ。現に立派な名で呼ばれている国や家の多くは、その風呂場なんだよ。欲得殿なんだよ。世界地図をひろげれば、いろいろな色と形をした欲得殿が目白押しをしているし、往來を歩けば、そこにもここにも、欲得殿の棟が聳えているのを見るんだよ。而も、その欲得殿は皆立派に『浴徳殿』と書き代へられているんだよ。」（八ページ）。

「支那を見て来た男の言葉」は、一二回目で終わっている。しかし、なぜか、この第五卷第三号の連載文の末尾に、（つゞく）と記されているが、第一回の中国旅行の紀行文はそれ以上は、見当らない。前号の第五卷第二号の末尾に、（申訳け・・・次号からは少し駆け出して早くおしまひにします。だからと長く続いて読者に迷惑をかけていることを謝します。筆者）とも書いているので、如是閑自身、そろそろ、紀行文にケリをつけたかったのであろう。おそらく如是閑は、この紀行文連載中の約一年半以上の間に、着々と中国問題についての本格的な研究をすすめており、その成果を発表する方向に気が向いていたのではないかと思われる。事実、かれは、『我等』第五卷第四号、一九二三年（大正一二）四月の「傾向及批判 支那人の現代的空想」以降、一九三一年（昭和六）の満州事変勃発の前夜までに、約一五篇ほど重要な中国分析の論文を書いているのである。

それはそれとして、如是閑の紀行文は、秀逸である。そこには、風刺のきいたユーモアに富んだ鋭い時代批判とともに中国人民にたいする暖かい見方が随所に散りばめられている。日本をはじめとする西欧列強の帝国主義的行動や中国蔑視感さらには中国支配層（軍閥）間の抗争状態にたいして痛烈な批判を加えながら、如是閑は、「国亡びて生活あり」という観点から、中国の未來を人民大衆のもつたくましい生活力・生活本能にみいだしている。

しかし、その後も日本の大陸（満蒙）政策は、いっこうに改まるどころか、中国全土を支配しようとする政策をますますエスカレートさせていく。この事態を如是閑はどのように分析し、それにどのような警告を発していたか。

(c) 大正デモクラシー後期から満洲事変の勃発まで

先ほども述べたように、第一回の中国旅行（一九二二年八月中旬から一〇月初旬）によって強烈な印象を受けた―それはある意味では、かねてから如是閑が抱いていた中国観についての確信をますます強めたものであったといつてよい―如是閑は、当時の日本政府や軍部の誤った中国政策を改めさせ、またそうした軍国主義的・帝国主義的政策の不当性を日本国民に知らせるために、主として『我等』誌上において次々にその中国論―中国分析―を展開する。

以下、はじめに、その主要論文を年代順に列举しておく。「傾向及批判 支那人の現代的空想」(『我等』第五卷第四号、一九二三年四月)、「支那の政治的亡国的状態」(『我等』第五卷第七号、一九二三年七月)、「支那の将来に対する思想的根拠と産業的根拠」(『太陽』第二九卷第一〇号、一九二三年八月)、「労資の対立と民族的対立―特に支那の現情について」(『我等』第七卷第六号、一九二五年六月)、「支那の軍閥と現代国家」(『我等』第八卷第五号、一九二六年五月)、「支那の国家秩序と社会秩序」(『改造』第八卷第八号、一九二六年七月)、「近代国家と支那の革命」(『我等』第九卷第二号、一九二七年二月)、「支那の革命と政治の必然性」(『我等』第一〇卷第一号、一九二八年一月)、「軍国史的錯誤と出兵癖―済南事件の責任」(『我等』第一〇卷第五号、一九二八年五月)、「支那大陸に対する我が軍事行動」(『改造』第一〇卷第六号、一九二八年六月)、「南京政府と支那統一」(『我等』第一〇卷第六号、一九二八年七月)、「支那大陸に於ける『外国』の運命」(『思想』第八六卷一九二九年七月)、「日支関係の『悪化』と帝国主義戦争の停顿」(『改造』第二三卷第一〇号、一九三二年一〇月)、「九月八日執筆」などがそれである。



そのほか、第二回中国旅行にかんする紀行文を「北京再遊問答」というタイトルで、『我等』第八卷第九号から第一二号（一九二六年八月～十二月）にかけて、また第三回中国旅行にかんする紀行文を「哈爾賓直行」というタイトルで『我等』第一〇卷第一〇号から第一一卷第一号（一九二八年一月～一九二九年一月）にかけて連載している。第一回目の中国旅行の時期より刻々と変化し悪化していく日中関係を如是閑はどのように感じとったか。折にふれて紹介してみたい。さらに、「对支国策討議」（『改造』第六卷第一号、一九二四年一月）、「支那社会運動の現状」（『批判』第一卷第四号、一九三〇年八月）も重要である。

以下、主要論文について簡単に紹介しコメントを加えておく。

i 「傾向及批判 支那人の現代的空想」（『我等』第五卷第四号、一九二三年四月）

『我等』誌上に掲載されている「傾向及批判」という二、三の小論は、他の雑誌でもよくみかけるいわゆる「国内・国際思潮」などに類するものといえる。したがって、これらの論文は、それぞれ分量的には短いが重要な内容を含んでいる。

さて、論文が書かれた頃の国際政治的背景としては、ヴェルサイユ講和条約（一九一九年一月一八日～六月二八日）、とくにワシントン会議（一九二一年一月二日～二二年二月六日）によって、極東に新しい国際秩序（ワシントン体制）が成立し、大戦中の一九一六年に「二一カ条」要求を強制的に中国に承認させて、山東省地域の權益を確保し、それを足場に中国大陸内部への進出を虎視眈々として狙っていた日本の極東外交政策が欧米列強に批判されはじめてきていた時期であった。

ワシントン会議を通じて、日本は山東省權益等、これまで獲得して来た中国における權益の一部放棄を余儀なくされ

たし、また大戦後、極東におけるアメリカの發言権が強まり、それまでにもあった中国問題をめぐる日米間の対立が—  
そもそも、アメリカは「二一カ条条約」については不承認の立場をとっていた—いよいよ顕在化し、それが、のちの太  
平洋戦争の遠因となった、といつてもよいであろう。

ワシントン会議の席上、中国全権は、「二一カ条」条約は、世界大戦中、日本の威嚇によつて結ばれた不当な条約で  
あるとして、その廃棄を主張、これにたいし、日本側は、当効条約は、適法な手続きで締結されたものであると反論し  
た。

本論文では、如是閑は、「支那政府が二一箇條の廃棄を申込んだのも、國際法上の法則や道徳からは全く無鉄砲と言  
ふ外ない突飛な交渉であるが」（五五ページ）と述べて一見、中国政府の要求を批判しているかのように見える。しか  
し、この論文の全体をみると、如是閑の真意は、むしろ中国支持である。なぜなら、かれは現存の國際秩序は強国の帝  
国主義的立場から作られたものであり、その立場からみれば中国が無鉄砲な挑戦をしたと捉えているからである。

したがつて、かれは今回の中国の条約廃棄にでた行動は、國際秩序を破る空想であると述べながら、「帝國主義の否  
定は、新たな國際的秩序を産み出すやうな傾向に向かつてゐるのは事実である」（五五ページ）から、「支那がその無用  
な行動に出たのは、・・・その意味で実行的には全く無能力な支那の主張も亦現代的意義を持つてゐると言へる」（五  
五ページ）、また「今日の空想は明日も亦空想であるとは限らない」（五六ページ）として、中国の行動のなかに、ワシ  
ントン体制ではない新しい國際秩序（反帝國主義）の方向をみいだし、それを支持していたものといえよう。如是閑得  
意の反語的用法による、みごとに「日本の大陸政策」批判というほかない。

『我等』の「主張」に当たる本論文は、無署名論文ではあるが、論旨・文体からみて如是閑の手になるものといつてほぼまちがいない、と推測されるので採用した。

ここではまず、一九一九年の五四運動以後も、いぜんとして南北の軍閥たち〔陸榮廷、陳炯明、呉佩孚、段祺瑞、馮国璋、曹錕、張作霖、黎元洪〕が、それぞれに離合集散しまた外国の勢力を借りて、抗争に抗争を続けていた一九二〇年代初期の中国の政治的亡国状態が画かれている。

それによれば、共和制（中華民国）成立前の中国は、人民の生活と国家（軍国小国家群）の生活とがまったく利害反するあるいはまったく無関係な、軍国国家組織の典型であったとされ、この組織は、共和政治に移ってもほとんどなんら変化しなかった。と述べている。

そして、辛亥革命は、欧米の市民革命とは異なり、たんなる支配階級間の外部構造〔政治組織〕の変化にすぎず、産業生活者の生活組織の進化をもたらしたものではないにもかかわらず、革命派〔孫文ら〕の人々は、このことを十分に認識していない、ともいう。したがって、中国の小軍国国家の争奪戦をなくするにはどうしたらよいかを予見することはできないが、こうした抗争に終止符を打つことはこんにちの世界の社会的傾向〔民衆の時代〕によって定まるだろう、としている。つまり「支那の国家組織を根本的に崩すものは、政治革命ではなく、もっと社会的の性質を持った革命でなければならない」（五ページ）、また「詳しく言へば、支那の産業状態が、今日の原始的の自然状態の産業から、資本主義的のそれに進み、その結果に基づく生産階級の社会運動―それだけが決定的の変化を支那の国家組織に与へるものであらう」（六ページ）。と。

翌一九二四年一月、国民革命を進展させるために、孫文らは、国共合作（第一次）に踏み切っている。

iii 「支那の将来に対する思想的根柢と産業的根柢」(『太陽』第二九卷第一〇号、一九二三年八月)

本論文は、軍国階級(軍閥)の抗争は、生産階級の台頭によって終止符を打たれるであろう、というiiの主張をさらに敷衍したものである。以下、それに関連した箇所を二、三引用しておく。

「……支那民族の此の驚くべき文化の包容力は恐らく彼等の社会的生存力のエネルギーが今尚ほ原始的に強烈で頑強である所から考えて決して消耗し盡された力であるとは思はれない。而して其處に支那民族の将来があり、又恐らく其處だけに彼等の民族的生存の方向が潜んで居るのではないかと思はれる。」(二五ページ)。

「以上のやうな事実に立脚すると、今日の中華民國の政治的混乱などは、支那民族の将来を考えるに當つて、強ちに拘泥すべき事実ではない。要するに現代の支那の政治は数千年來の累代のそれと同じく、支那民族の社会的生存を離れた高い高い空中の樓閣である。その崩壊はそれの建設と同じく支那民族の原始的な生活力を如何ともすることが出来なかつた。軍国的掠奪は支那民族の社会的生存者を何時迄も原始的な低級の生活に於て圧迫したと謂われて居るが、併し彼等は決してエネルギー迄も掠奪しされはしなかつた。」(二五ページ)。

「……故に支那民族自身の永遠の計は、其の生産階級の最も健全な、最も進歩した、併し乍其の原始的エネルギーを喪失せしむるものでない所の組織的進化に在るべきものである。此の意味に於いて将来の支那は古來の支那が文化の中心を軍国的首府に發したと反対に産業上の地方的本拠に發するに相違ないであろう。而してそれは当然世界一般の産業的進化の経路を辿つて社会主義的傾向を採るであろう。今日の政治階級の夢はそれまでの命に過ぎない。」(二七ページ)。

社会主義的傾向という語がここではじめて登場してきていることに注意しよう。如是閑は、資本主義の發展↓労働者階級の増大↓社会主義革命へ、という正統マルクス主義的図式で中国革命による軍閥の崩壊と国家統一を考えていたよ

うである。ちなみに如是閑は『改造』第六卷第一号（一九二四年一月）の「対支国策討議」（出席者、長谷川如是閑、堀江婦一、吉野作造、永井柳太郎、米田実、福岡徳三、小林俊三郎、山本実彦）のなかでも同趣旨のことを盛んに発言している。しかし、その後の中国統一の展開は、農民革命と農村の封建勢力を転覆することなしには中国革命の勝利はない、とする毛沢東率いる中国共産党によって達成されたわけだが、この時点で如是閑が中国革命の性格を見抜けなかったのは無理からぬ話であつたらう。

iv 「労使の対立と民族的対立―特に支那の現情について」（『我等』第七卷第六号、一九二五年六月）

一九二五年二月、上海における日本人経営の紡績工場における中国人労働者弾圧に抗議してストライキが起こり、それは青島、漢口、武昌、広洲、抗洲などに次々に波及した。末尾に五月二〇日〔執筆終了〕と記された本論文は、この事件に題材をとって書かれたものと思われる。ちなみに、この労働運動は、その後、五・三〇事件と呼ばれる「反帝」・「反日」運動として中国全土に拡大した。生産階級のエネルギーに中国の未来をみていた如是閑にとって、今回のストライキ運動は、格好の題材となったことは容易に推測できる。この論文で、如是閑は、植民地支配下にある国では、帝国主義諸国による経済的征服に対し、民族的感情による反抗が無産者意識の反抗に加味されるといふ性質をもつたものになることを鋭く指摘しているのである。

v 「傾向及批判 支那の軍閥と現代国家」（『我等』第八卷第五号、一九二六年五月）

本論文は、これまで如是閑が述べてきたことの繰返し、あるいは整理したものといえる。

中国が、あれほどの文化国、生産国、大国でありながら、なぜ軍国的無政府状態を続けているのか、中国は果して欧

米・日本並みの現代国家に変身できるのか、というのが本論文のテーマとなっている。

前者については、中国は辛亥革命によっても欧米型の市民革命を経ていないことにより依然として軍閥間の抗争が続いていること、後者については、中国では政治革命が社会革命と併行しない限り達成されないであろうし、軍閥政治を否定する条件としては、中国の産業がまず資本主義化することである、としてかれ従来の持論を展開している。

大正末期、如是閑自身が、もつともマルクス主義に接近した論文といえ、それを証明するかのようになり、末尾部分で次のように述べている。「しかし、支那が資本主義化するや否やが既に問題になっていて、支那は資本主義の過程を経ずに共産化する可能性があるといふ観察もある。此見地は、必然に、政治革命的手段を予想する。組織の突然変異を持ち来すことによって、新国家的形態を生ぜしめるといふのである。さういふ問題は一つに現代支那の社会的性質によって決定されるべきものであるが、何よりも確かにその問題を解決するものは今後の歴史である」(八〇ページ)という指摘がそれである。そして、一九四九年、中華人民共和国が成立したことにより、歴史がそれを証明したのであるが。

vi 「支那の国家秩序と社会秩序」(『改造』第八卷第八号、一九二六年七月)

本論文は、如是閑の第二回目の中国旅行後に書かれたものである。一九二六年五月五日から六月下旬にかけて如是閑は、南満州鉄道会社の招きで、安東、奉天、撫順、長春、吉林、西平街、洮南、昂々溪、哈爾濱、大連、天津、北京など主として東北地方(満州)を中心に回遊している。そして、そのときの旅行記を、「北京再遊問答」というタイトルで、『我等』誌上に四回(八、九、一一、一二月)と「蒙古から帰って」(『中央公論』第四一巻第一〇号、一九二六年一〇月)を連載している。約五年振りの中国旅行で如是閑はなにをみたのか。「支那の国家秩序と社会秩序」を説明するまえに、簡単にふれておきたい。

如是閑が中国訪問から帰国した直後の一九二六年七月に、国共合作により力をつけた国民党は、蒋介石を国民革命総司令官として北伐を開始し、翌年三月末までに楊子江以南の地を制圧している。一九二四年九月、中国統一を目ざして北伐を宣言し、一九二五年三月二日「革命いまだならず」と遺言して北京に客死した孫文の遺志がいよいよ実現されようとしていた。そして、蒋介石北伐開始前後の北方軍閥は、張作霖、呉佩孚、孫伝芳、閻錫山、馮玉祥がそれぞれの地域に割拠していたのである。

如是閑が六月下旬に北京を再遊したときには、「……何しろつい近所の南口付近に国民軍〔馮玉祥の軍隊〕が陣取って、張作霖、呉佩孚の聯合軍と対峙しているので、北京は兵隊で目を突くやう……」（七二ページ）な状態だったらしい（『我等』第八卷八号、一九二六年八月）。

今回、如是閑は天壇にも行ったが、そのときの感想として、「……支那の支配階級の理屈は甚だ簡単で、『天の命』の一本調子でいいのだから、そいつをいろいろに思想的又は言語的の道具立てで飾り立てたものなのだよ。然し、一方でそれを言語や思想の道具立てで飾り立てると同時に、儀式や、殿堂や大理石の壇などで飾り立てるのだよ。然しそれらの有形の道具立ても、言語や思想の無形の道具立ても、みんな支配階級だけを相手のプロパガンダだから、平民どもにはちつとも触らせなくともいいし、見せもしなかったのだよ。あの天壇だって、四書五経と同じで、支配階級にしか見せなかったのだからね」（二〇二ページ）と述べている（『我等』第八卷第九号、一九二六年九月）。

また如是閑は、北京の「孔子廟」と「国子監」を尋ねているが、「孔子廟」が歴代の支配階級の道徳的道具とされてきたこと、「国子監」が国家のための学者と国家の役人を作る目的のための大学であった（『我等』第八卷第一号、一九二六年十一月）と述べている。

さらに如是閑は、アメリカ人の建てた北京清華学校の素晴らしさにふれて、日本の対支文化事業が評判悪いのは、「一

切日本政府が直接手を下してアメリカのやうに全然金を投げ出して米支の委員に任せ切りにするといふ方法をとらなかつた」(一〇二ページ)ためだと述べ、日本の「金もだすし、口もだす」式の高慢なやり方を批判している。(『我等』第八卷第一二号、一九二六年二月)。

さて、如是閑の紀行文にだいぶスペースを費やしたので本来の「支那の国家秩序と社会秩序」に移ろう。この論文は、A、中華民國の一青年、B、ある日本人 というA・B二人の対話形式で話がすすめられている。

ここでは、当時の中国が戦乱状態にあることを嘆いて、どうしたらよいかと煩悶している中国青年にたいして、如是閑は、「B・・・支那の社会の上層に今日行はれている軍閥の争ひや、政治の争ひといふものは、これは絶対に支那の社会的生存の過程とは別のものです。・・・支那は数千年来人民自体の社会的秩序によって生存を支えてきたのですが、将来も同じく、その組織的の生活力によって榮えて行くでせう。軍国的統一や政治的統一はあってもなくっても、それは支那人民の生活の死活の問題ではない」(一五五―一五六ページ)と冷静な考察を述べている。中国の都会や農村を巡ってみると、中国人の生活秩序がそれ自体の發展を遂げており、軍国階級や政治階級が、人民の發展に反比例して退縮している、中国人民の生命力・生活力ははかりがたいというのが、如是閑の第二回中国旅行の結論であった。そのことは、同じ頃書かれた「蒙古から帰って」の冒頭で、「A 今度の満蒙旅行の感想は何うだね」、「B 支那人という民族―だか何だか知らないが、とにかく、驚くべきものよ。汝の名は支那人だね」(説苑一〇三ページ)という言葉によってすべてを物語っているといつてよい。

v 「近代国家と支那の革命」(『我等』第九卷第二号、一九二七年二月)

本論文は、蒋介石が北伐を開始し(一九二六年七月)、一九二七年一月には国民政府を武漢に移転させた頃の状況を



背景に書かれたものであり、そのテーマは、中国における近代国家成立の可能・不可能、もし可能ならば、どのような革命によってか、を論じたものである。国民党が中国共産党のバック・アップのもとに力をつけてきていた状況を考えれば、こうしたテーマが取りあげられたとしても不思議ではない。

はじめに如是閑は、中華民国成立前の中国の政治を軍国国家の交替による「易姓革命」の歴史である、とし、そのうえで、中華民国成立後になっても依然としてそうした性格をもつ中国において軍閥抗争が続いているため、中国は今後、先進諸国同様に、資本主義化するのか、またそれにともなつて起る市民運動が果して市民国家を成立せしめるか、という問題を立てている。これについては、如是閑は、中国の市民は中世式のギルドマンであつて、近代的市民ではなく、「ギルドマンは国家の政治とは没交渉に、それを防衛する組織に於いて彼れ等自らの経済組織を支持するものである」（一五ページ）と市民は、それ自身を国家の政治に投げ入れることによつてその経済組織を發展せしめるものである」（一五ページ）と述べ、ギルドマンと近代市民のちがいをあげ、「市民的政治運動が、支那の小軍国国家を崩壊せしめるほどに發展することは容易でない」（二六ページ）とやや悲観的見解を述べている。

しかし、展望はある。この点について如是閑は、「それ〔無産者集団〕が一度び統制され組織された時に、如何なる社会的勢力として現はれるかは想像に余りある」（一八ページ）とし、「支那に於ける資本主義的施設の進行と、世界大戦後の列強の社会的並びに軍事的地位の変化とは完全に右の二条件〔無産者運動を有力にする経済組織の進行と、世界大戦後の列強の社会的並びに軍事的地位の変化〕を充たしたものであつた。広東〔南方〕政府の赤化は即ち此の機会を利用したのである」（一八―一九ページ）、「この支那人自身の経験的意識とその実現手段たるロシヤ式方法とは南方政府をして急激にその革命的本業を推抄せしめ、広東国家の組織的完備となり、香港圧迫の成功となり、蒋介石軍の進出となり、楊子江一帯への勢力拡充となり、つひに租界の強制回収といふ国際史上に珍らしい新方面の開拓となつた」

(一九ページ)と述べている。

とはいえ、如是閑は、この時点で無産者独裁の政府が成立するとはみていない。南方政府の最も重要な効果は、その排外的運動であり、その目標は市民国家の建設にあつて、南方政府は無産階級的独裁の意向はもっていない、また中国における自主的市民国家の建設を防いでいるものに、外国の帝国主義政策がある、と指摘しているにとどめている。そして、この年の七月七日に、国民党と中国共産党はついに分裂(国共分裂)している。

vii 「支那の革命と政治の必然性」(『我等』第一〇巻第一号、一九二八年一月)

しばしば述べてきたとうり、如是閑には、資本主義の形成・発展、市民国家の成立がなければ、共産主義革命はありえないだろう、というイメージがある。そこで、一方では、孫文らの国民党派が民衆のエネルギーの重要性を認識しながらも、軍閥の勢力均衡や知識階級の力に依存している点については批判的であつたが、同時に、共産党の行動についても時期尚早とみて次のように述べている。

「現在の支那に於いては工人及び農民の組織が、それ自体では、いまだに革命的勢力として結成される程度に達していなかつた。同時に、支那の産業状態も、資本主義の勃発過程までは進んでいないことは事実であつて、従つて今日に於て、その発達を極端に圧へることは、支那の将来にもち来させるべき共産的社會の基礎的条件を中断せしめるやうなものでもあつた。かやうな条件の下に、急速の共産的組織を作ることとは考え得れない。そこには先づ近代的ブルジョア革命が成立せねばならぬ。されば、当然に共産革命的運動も、近代的政治革命の過程に混入する。」(一七ページ)。「支那に於ける革命の意味を完ふするためには・・・資本主義的組織の下に於ける無産階級の編成が完成されねばならぬ。その第一条件たる、植民地形態から脱して支那自らの資本主義的形態に進む過程を阻止する封建的支配の撤廃さへ為し

遂げられない間に農人や工人の軍隊を組織して都市を占領するやうな騷擾を演ずるのは、全く政治集团的昂奮でなければ、英雄的遊戯たるに止まる。広東に於ける最近の共産党の失敗は当然であり、それに対する反対軍の復讐的慘虐、市民の反感的暴行等も亦予期せられたことである。」(一八ページ)。

中国の国民革命は、国共合作によって展望をみせはじめたが、同時に国共のヘゲモニー争いによって革命の帰趨は混沌たる状態になった。如是閑もまた、中国の将来がどのような方向と方法については正確には予測できなかつたであろう。

viii 「軍国史的錯誤と出兵癖—済南事件の責任」(『我等』第一〇巻第五号、一九二八年五月)、「支那大陸に対する我が軍事行動」(『改造』第一〇巻第六号、一九二八年六月)

この二つの論文は、政友会総裁田中義一が内閣を組閣した(一九二七年四月二〇日、首相が外相を兼任)直後の五月二八日に、居留民の生命財産の保護を理由として、山東省に出兵することを決定し、翌二八年(昭和三)四月一九日も重ねて山東出兵をおこない、五月八日にはついに済南で日華両軍が衝突し、一〇日には済南を占領した、いわゆる「済南事件」を取り扱ったものである。この事件は、それまで中国内政不干涉主義のジェスチャーをみせてきた日本が公然と干涉政策をとるようになった象徴的事件として、きわめて重要である。この事件について如是閑は次のように批判している。

「日本政府の支那に対する今度の出兵の如きは色々な口実を列べているにも不拘、事實は唯全く軍国史的幻想のさせた業である。」(五ページ)。

「済南のやうに日本の支那に対する資本主義的帝国主義にとっては甚だ枝葉の部分に過ぎない地域に、恰かも領土的

空想に似た執着をもつて、危害を避ける用意をする代りに危害を侵してその地域に於ける日本の勢力を維持しやうと力める如きは、史的幻想の他にその理由を発見することが出来ない。」(五ページ)、「そこにいる日本の二千の小商人にとっては一時的引揚げの方が、危険を冒してその地域を守るに比べて経済的にもどれだけ利益であるか解らないに拘はらず、殆んど利害を超越してその歴史的特権(?)に執着し、終に数百人が惨殺されたといふやうな—その事実はまだ明かでないが—顛倒した酬いを受くるに至ったのである。」(五ページ) —以上『我等』。

「日本人に遺伝的な、支那大陸に対する軍事的衝動に基く政策に、根本的反省を加へねばならぬ時が愈到達したのである」(二二四ページ)。「資本主義が民族主義化することは、各国自身覚えのあることであるから、列強は、支那を日清、日露当時の清国と同視する誤りに陥らない以上、さういふ段階に達した支那に対して、最早わが満州占領当時のやうな企図をもち得ないことは明瞭である」(二二八ページ)。「然るに日本は、遺伝的に支那大陸に対する一種の心的態度を持し、わが国家主義的見地をも、全然、対大陸的のさういふ××××に基けて構成しているかにさえ見える。この伝統は、日清戦争の勃発によって××××を感じた結果大分緩和されたに相違ないが、然し今日なお支那といへば、そこに一種の地域的根柢をもたねば承知しないやうな心理状態に在ることを免れない」(二二八ページ)。「近代国家的接触は、どこまでも市民的協同に根柢せねばならぬ。・・・資本主義国家の態度としては××××××(今回の済南事件は?)、著しい不幸であった。当分わが資本主義者はその酬いをうける覚悟をもたねばならぬ」(二三〇ページ) —以上『改造』。

ここで、気が付くことは、『改造』論文では、伏字がいちじるしくふえている点である。日本政府が、まともな大陸政策批判にいかにか神経をとがらせはじめてきていたかの証拠といえよう。

ix 「支那大陸に於ける『外国』の運命」(『思想』第八六号、一九二九年七月)<sup>5)</sup>

本論文は、中国大陸における帝国主義列強とくに満州・中国大陸における日本の勢力は、敗北の一途を辿りつつある、ということ述べたものである。「支那人は、アジア大陸にひろがる大領土を有し、それを支持する組織能力は、政治的にも、然しそれよりは一層経済的に確実なるものをもっているのだ。支那大陸に跋扈する『外国』の如きは、このマシモスの足下に蹂躪されることからどうして脱れることが出来る？・・・支那に於ける『外国』の運命はもう見極められている。」(三九ページ)。この如是閑の予言は、それから二〇年後の中華人民共和国の成立によって達成されることになるが、そのまえに不幸な満州事変・日中戦争などの一五年戦争がすぐそばまで迫ってきていた。

x 「日支関係の『悪化』と帝国主義戦争の停頓」(『改造』第一三卷第一〇号、一九三一年一〇月)

済南事変後、日本は満州の実力者張作霖を通じて日本の満蒙特殊権益を守ろうとし工作を続けていたが、満州を直接日本の支配下におこうとした関東軍は、張作霖を爆死させ(一九二八年六月四日)、日本の満州侵略の意図はますますエスカレートしていった。そして、それから三年後、ついに満州事変が勃発した。(一九二八年九月一八日)。

この論文は末尾に「九月八日」執筆終了と記されているから、柳条湖事件の勃発一〇日前に書かれた貴重なものといえる。

ここで如是閑は、日清・日露の頃の日本の大陸政策は、軍国的領土主義の発動としてのものであったが、満州の特権を日本がロシアから引継いだ頃には、満州問題は、欧米の資本主義的侵略の問題として捉える必要があったことを強調している。そして、欧米列強の中国侵略は中国に資本主義的発展をもたらし、そのことが革命運動と結びついた排外主義的国民運動をもたらすようになったにもかかわらず、日本は依然としてそのことが見抜けず、中国をもっぱら領土拡張主義の観点からみていた。二二カ条要求や西原借款はそうした錯誤にもとづいたものであった、と如是閑は述べ、

「その結果日本は会議〔ワシントン会議〕に於て、中部及び南部支那に於ける支那国家の政治的自主と列強の勢力とを尊重する代りに満州に於ける日本の特権の不可侵を主張し、承認を得たのであった」(四五ページ)と述べている。しかし、これを中国側からみれば、満州は、一つには政治的統一の障碍としての日本の勢力をそこから排除すべき土地であり、二つには、日本によって開拓された満州という資本主義の処女地を「支那ブルジョアジー」の経済単位として包括する必要があった。ここに、日本と中国との間の対立、また日本とアメリカ、イギリスなどとの中国をめぐる利害対立が起るわけだが、如是閑によれば、「今日欧米に於て戦争の危険を最も強く警戒するものは最高の資本主義者〔独占資本家〕であるやうに日本でも恐らく最高段階の資本主義者は、満州を動因とする戦争の危険性を最もよく知っているものであらう」(五〇ページ)、と満州を契機とする日中戦争、世界戦争勃発の危険性を抑制する独占資本家側の心的要因をあげ、事態の進展をやや楽観的にみている。

しかし他方で、如是閑は、軍部の動きに警戒しているが、対支問題についての軍部の強硬な態度は、「特定の政治的見地に基づいた態度であるよりは寧ろそのギルド的自己防護の動機によるものではないか」(五二ページ)として、最高資本主義の論理に反した行動はするまいから、ブルジョア政党は軍部の動きを抑制できるであらう、とこれまた軍部の突出はあるまいと楽観視している。しかし、日本ブルジョアジーと軍部は、明治維新以降一体のものとして行動してきたのだから、如是閑の満州問題の分析がいかにかいものものであったかは、続く満州事変以後の日本の行動によって証明されることになる。

以上で、満州事変以前の如是閑の中国論を終る。次号においては、満州事変、日中戦争期、敗戦、戦後における如是閑の中国論について述べる。

(1) この時期の如是閑については、『長谷川如是閑—人・時代・思想と著作目録』（長谷川如是閑著作目録編集委員会）、中央  
大学出版部、昭和六十年一月、田中浩『長谷川如是閑研究序説—「社会派ジャーナリスト」の誕生—』、未来社、一九八  
九年一二月を参照のこと。

(2) この論文全体を通じて中国近現代については、市古宙三『中国の近代』（世界の歴史）20）、河出書房新社、一九六九年  
一二月、日本側の動きについては、江口圭一『二五年戦争小史（新版）』、青木書店、一九九一年五月、大畑篤四郎『日本  
外交史』、東出版、一九七八年七月を参照させていただいた。いちいち参照ページ数を明記してないが、大変有益な著作で  
あり、記して感謝の意を表したい。

(3) 日本人は、もともとは、平和主義的で寛容な国民的性格をもっていた、という考えは、軍部のいう「皇道主義」に対抗す  
るものとして、一九三四年頃から日米開戦頃まで、さまざまな箇所では閑が指摘している点に注意。

(4) 孫文については、池田誠『孫文と中国革命—孫文とその革命運動の史的研究—』、法律文化社、一九八三年参照のこと。

(5) 一九二九年七月の「支那大陸に於ける『外国』の運命」では、如是閑は外国勢力の衰退を予示しているが、そのことは、  
かれの第三回目の中国旅行（一九二八年一〇月一五日—十一月二二日）の紀行文（哈爾濱直行）三回連載）のなかでもす  
でに先き立って指摘されている。紹介しておく。「この支那に於ても、日本や英国や、支那に対する過去の軍事的功績を  
出来るだけ埋没させた方が、今後の仕事をさせるに都合がい、という形勢になりつゝあります」（『我等』第一〇巻第一〇  
号、一九二八年一月）。「満州に対する日本の国策も、日本及び満州に於ける資本主義の発展過程に伴って変化すべきも  
のたることは明瞭で、今やその転換期に面してゐることは、私共局外の観察者よりも、当事者その人の間に既に気づかれ  
ていること、思はれます」（『我等』第一〇巻第一二号、一九二八年一月）。

「『外国に日本を作る』といふ古代的の侵略的態度を日本人は満州でだけは好き勝手に振舞っていることが出来ると思っ  
ていると、近い将来に飛んだ眼に逢はねばなりません。」「支那人のこの大きいスケールを日本の尺度で計るのが、すべて  
の間違ひの基です」（『我等』第一二巻第一号、一九二九年一月）。

一九三〇年以降、中国共産党の活動が活発になり、とくに農民革命を重視する毛東沢路線が勢いをえてきていた。こうし  
た問題の認識については〈座談会〉「支那社会運動の現状」（出席者、王子言、長谷川萬次郎、福岡誠一、田中九一、荏原  
遼、嘉治隆一、『批判』第一巻第四号、一九三〇年八月）。満州事変後の抗日統一戦線の形成、中国社会主義革命は、中国  
共産党を抜きにしては考えられないのだから、王、福岡らの中国共産党に対する評価、日本側の中国共産党認識の低さの  
指摘（嘉治）、などは重要であろう。ここでも如是閑は、「所が支那の共産党は、日本の共産党と同様に、〔資本主義の—筆  
者〕崩壊が余りに早く来るといふ錯覚をもっているのではあるまいか。支那革命を成就するには支那の資本主義そのもの

を覆すことが必要なのだ。そして都会にソビエットが出来ると農村革命は自ら出来るといへる。農村に熱中するから運動が絶えず移動することになるのではないか」(九五ページ)と述べているのは、ロシア革命や中国革命の性格を十分に把握できていないのではないかと思はれる。

〔付記〕 本論文は、一九九一年度(一般研究A)「戦間期日本資本主義の国家像」(研究代表者 田中浩)の科学研究費補助金の助成をえて書かれたものである。